書　評

ヒュパティア
―後期ローマ帝国の女性知識人―

エドワード・Ｊ・ワッツ著，中西恭子訳，白水社，2021 年

元ルイジアナ州立工科大学
菅野　仁子

世界的な混迷が続く現在，先進国の中には，これからの方向性のヒントを歴史から学ぼうとする動向がある．中でも，ローマ帝国の繁栄と衰退はよく引き合いに出される．それと同時に，ジェンダーの問題が認知されるようにはなったが，その理解の難しさ，問題の根の深さは言葉で表すことさえ不可能に思える．しかし，たった一人でも新しいモデルを知ることで，男性であれ女性であれ，自分の考え方や見方が変わるきっかけになる可能性がある．ヒュパティアの生きた時代は多神教と勃興しつつあった一神教の相克の時で，彼女の死はそこから引き起こされたため，それ以前の彼女の活躍は歴史の闇に覆い隠されて来たかに見える．ヒュパティアの本当の生きざま，日々の勇気を知ることは，今だからこそ，大変有意義なことに思える．

著者のエドワード・ワッツは，カリフォルニア大学で古代ヨーロッパ史を専門にしている歴史学者である．著者は，ヒュパティア（355－415）が何かの象徴としてのみ書かれてきたことに異議をとなえ，人間としての彼女の偉大さは，男性優位の社会の中で日々克服しなければならなかったささやかな障壁を，たった一人で勇敢に闘ってきたことにある，と序文に述べている．さて，序文のタイトル「大斎の殺人」は，大斎（四旬節）が，復活祭に先立つ 40 日間を指していることから，ヒュパティアの不当な死は，およそ 1600 年前のこの時期に起こったことがわかる．そして著者は，それを本書の丁寧に一つずつ積み上げられた十章を通して明らかにしようとしている．ここでは，各章のまとめやハイライトと思われる部分を引用していく．

第一章（アレクサンドリア）は，現在のエジプトに位置するナイル川河口の都市アレクサンドリアが，ヒュパティアが活躍したころは古代の大都市で，経済だけでなく文化の中心地であったことから描写を始める．そこで著者は，現代の大都市がただ一つの顔で代表されるほど単純ではないことを例にとって，古代アレクサンドリアもその例外ではないと言う．「二つの相異なるアレクサンドリアがどのような

ものであったかを説明する．本書の残りの部分では，いかに二つのアレクサンドリアがそれぞれのやり方で，ヒュパティアを，彼女の生きた人生を，そして，彼女の死を作り上げたかを示そう．」と語っている．

第二章（幼年時代と教育）では，その当時の校訂作業が現代の博士論文に相当していたことなどが説明され，「ヒュパティアとその同時代人は，彼女の校訂本をきわめて重要な学問的貢献として認識していたのである．」と結ぶ．この章では，（ヒュパティアと哲学）と題された部分が重要であると思われる．ヒュパティアは，哲学と数学の関係を明確にした第一人者であった．

第三章（ヒュパティアの学校）は，ヒュパティアの革新的な知へのアプローチがどんなものであったかを紹介する．彼女は「聴きたい者は誰にでもすべての哲学の教説」を説明し，「プロティノスから伝えられたプラトン解釈の伝統の継承者」となる．ヒュパティアは，「数学はプラトン主義哲学よりも下位の訓練ではない」と主張したアレクサンドリアで唯一の教師で，「観想による神性との合一に重点を置いたヒュパティアの教説は，学生たちがキリスト教徒であっても伝統的多神教徒であってもそこから確かな恩恵を受けることを保証した．」それが故に，伝統的多神教徒であったヒュパティアの下でも，「哲学者になりつつキリスト教にとどまることができる」高弟シュネシオスのような人物が育ったのである．

第四章（中年期）では，ヒュパティアを取り巻く宗教対立の悪化を描いている．特に，キリスト教徒の群衆によるセラペイオン神殿の破壊は「392 年の破局」として引用され，ますますアレクサンドリアという大都市が，彼女の知のリーダーシップを必要としていたことを説明している．

第五章（哲学の母とその子どもたち）は，ヒュパティアと弟子たちの関係をシュネシオスの書簡を参考にして構築していく．彼女の哲学者としての教えは，必要があるときは人々を助けるのも哲学者としての務めだと説いていたので，次の第六章（公共的知識人）の内容に自然につながる．第六章では，ヒュパティアが「帝国官僚とアレクサンドリアの地元の公職者に対する注目を集める助言者となった」と言い，「アレクサンドリアの高官たちは，着任するといつも，なにをおいてもヒュパティアに挨拶に詣でていた」と，そのありさまを伝えている．

続く第七章（ヒュパティアの姉妹たち）では，ほぼ同時代に生きたと思われる女性の数学者や哲学者たちを紹介し，ヒュパティアとの違いを議論していく．それによって，なぜヒュパティアだけが抜きんでた活躍ができたのかを分析する．数学と哲学を合体させることにより，知の力学を変更できたことと，数学的能力および彼女自身の哲学的な生き方を彼女のブランドの裏付けにできたことが挙げられている．

第八章（路上の殺人）では，「ヒュパティアが後継者を育てなかったため，彼女のキリスト教徒と異教徒の学生たちが分かち合えた，観想的で，宗教的に中立な哲学は，あっさり消滅した」と書いている．

第九章（ヒュパティアの記憶）と第十章（近代の象徴）では，ヒュパティアを「自分の都市と同胞市民をより善くするために公的生活にかかわった哲学者」であったと定義したのち，その本質がいかに歴史的に歪曲されて近世まで伝わっているかを例を挙げて説明している．

そして，エピローグ（伝説を再考する）では，我々がヒュパティアをどう記憶すべきなのか，著者の考えを述べている．「我々は，ヒュパティアを，ありのままの人として，正当に評価すべきである．ヒュパティアの苦しみの死と同様に，彼女の歩んだ人生を認識してはじめて，彼女の記憶に対して忠実でいられるのだ」と．

さて，混沌とした時代の中で，人間として何を目指して生きていけばよいのか迷う事もあるかもしれない．有限な生命であるからなおさらである．しかし，本書を通してヒュパティアの存在を知った読者には光が見えてくるはずである．今後，ヒュパティアの後継者を目指す老若男女が続々と出現してくることを願って止まない．